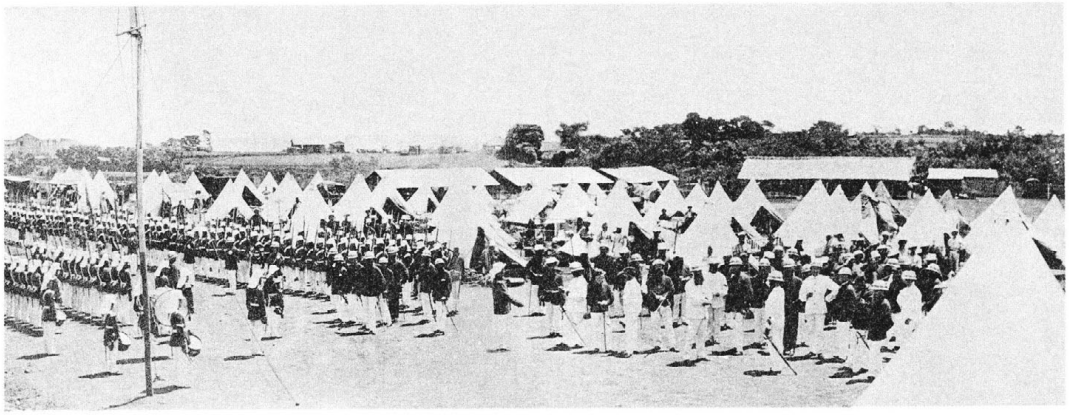
横浜開港資料館館報　YOKOHAMA ARCHIVES OF HISTORY NEWS　第63号

開港のひろば

Number 63

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3番地 電話 (045) 201-2100
発行日／平成11年2月3日(水)
印刷／㈱エイコープリント



横浜駐屯イギリス海兵隊の野営テント（1864年7月）（部分）The Royal Marines Museum 所蔵

山手の丘の赤隊・青隊

―幕末維新の英仏駐屯軍―

後年のノーコック
The Royal Marines Museum 所蔵

一八六三（文久三）年、イギリスとフランスの軍隊は、前年におこった生麦事件を契機に、居留民保護と居留地防衛を名目として横浜の山手に駐屯を開始した。以後、一八七五（明治八）年に撤退するまで一二年間駐屯した。日本人はかれらを赤隊・青隊と呼んでいた。

横浜開港資料館では、一九九二（平成四）年にこの駐屯軍を取り上げた展示「幕末の横浜山手　トワンテ山とフランス山」を開催したが、その後も調査を続け、イギリスとフランスにおいて各駐屯連隊が残した文書、写真、地図、絵、図面などの新たな関係史料を多数発掘してきた。

その内、質量ともにもっとも豊富な史料群はイギリス海兵隊（Royal Marines Light Infantry）関係のもので、おもにロイヤル・マリーンズ・ミュージアムが所蔵する退役将校あるいはその家族からの寄贈史料である。海兵隊は一八六四年から六五年にかけてと、一八七一年から七五年の全面撤退時までの二度、駐屯し、第一回の時には下関戦争に参加した。

上に掲げた写真は、来日間もない一八六四年七月の山手の丘（現在、ゲーテ座のある一帯）での野営風景である。海兵隊士官として駐屯したノーコック（H. J. L. Norcock）の旧蔵アルバムにおさめられていたパノラマ写真（部分）である。指揮官、サザー（W. G. Suther）中佐から本省宛て同年六月一三日付報告書によると、海兵隊の駐屯開始時のようすはおよそつぎのようであった。

「六月七日、横浜のバンド（海岸）に上陸した大隊は隊列を整え、居留地の向こう側のブラフ（山手）へと行軍し、野営地に到着した。テント用意、ポール用意、杭用意と大声で命令を発し、らっぱの合図で一斉にテントを立ち上げた。仕上がり具合は上々で、各兵士に防水シートと毛布が支給され、炊事場が設置され、すべてが二時間内に、状況が許す限りでもっとも快適な状態に仕上がった。しかしわれわれの到着三日前に作物が掘り出されたばかりで、その間大雨も降り続いていたため、野営はたいへんであった。」　（中武香奈美）

企展画

英仏駐屯軍と日本人社会

英仏軍は横浜に駐屯していた一二年間、地域の日本人社会にさまざまな影響を与えた。ここでは、当時の新聞記事をもとにその一端を紹介したい。

商取引

横浜居留地の英字紙 *The Japan Commercial News*（六四年三月一六日号）につぎのようなイギリス軍兵站部からの軍事用品入札公告が掲載された。

兵站部事務所では来る三月一九日、土曜の正午までにつぎの軍事用品の全部あるいは一部の供給を請け負うことを希望する者からの入札を受け付ける。四月一日から半年契約で、横浜駐屯軍用として生肉・生野菜・アメリカ産か日本産の上等の小麦粉・茶・砂糖・薪・日本炭・木炭・油・ランプ用芯・日々の馬糧。

申込書は二通作成し、「軍事用品入札」と表書きし、「兵站部上級将校」宛とする。

上記軍事用品についての詳細は兵站部事務所まで問い合わせること。事務所の場所はアメリカ領事館近くの税関の裏手。

申込者は居留地の外国人商人であったが、実際に多くの品物を調達したのは日本人であろう。

当時、駐屯していたイギリス軍はまだ第二〇連隊分遣隊のみであったが、やがて夏に入ると同連隊の本隊、第六七連隊分遣隊、砲兵隊、工兵隊、第二九ボンベイインド人歩兵隊が相次いで来日し（一部は年内に撤退）、六四年末にはおよそ九〇〇名の陸軍部隊と五三〇名の海兵隊が駐屯した（以下、記載する人数は概数）。大口の商取引先が出現したのである。

翌年の *The Japan Times' Daily Advertiser*（六五年九月一三日号）には同兵站部から海軍病院用品も加えられたつぎのような公告が出された。

駐屯軍用として日本産の上等の小麦粉・茶・ランプ用油・ランプ用芯・馬糧。小麦粉と茶、油については申し込み時に見本品を付けること。

海軍病院用としてシャンペン・シェリー・ポートワイン・ブランデー・ジン・ウイスキー・エール・黒ビール・炭酸水。見本品を付けること。

一〇月一日より半年契約で。

申込は九月二一日正午までに当事務所へ。

すでに海兵隊は撤退していたが、入れ替わりに第一一連隊（一五〇名）と第二〇連隊（二〇名）、および両連隊所属兵士の妻子（妻六〇名と子供一〇〇名）の横浜到着が間近であった。コレラと熱病が蔓延する香港から脱出してくるもので、多くが病人であり、病院の受け入れ態勢の整備が急務となっていたことをうかがわせる公告内容となっている。

さらに翌六六年の同紙（六六年一月二二日号）に掲載された同兵站部からの募集公告の内容は一層、多様さを増したものとなった。

駐屯軍と海軍病院用として牛肉・日本産小麦粉・茶・砂糖・馬糧・燃料・灯りなどの諸雑品。

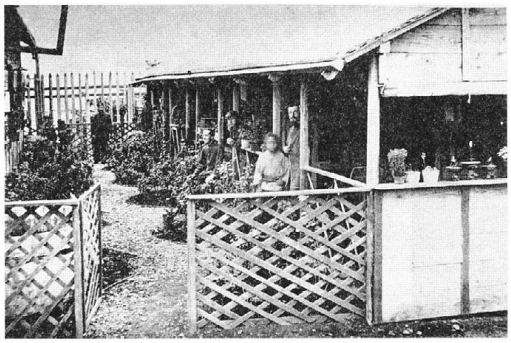
病院用に強い酒・エールなど・牛肉・羊肉・果物・小麦粉・野菜・食料雑貨・燃料・灯りなど。

病院の寝具類の洗濯および繕い仕事。

兵舎の寝具類の洗濯および繕い仕事。

以上を四月一日より一年契約で。申込者は二月一二日正午までに見本品を持参の上、申し込むこと。

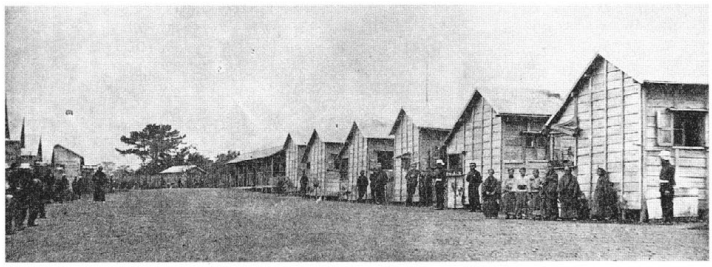
この頃、山手の兵舎にいたイギリス軍は第二〇連隊、第一一連隊、砲兵隊、工兵隊および第二〇連隊と第一一連隊所属兵士の妻子であった。



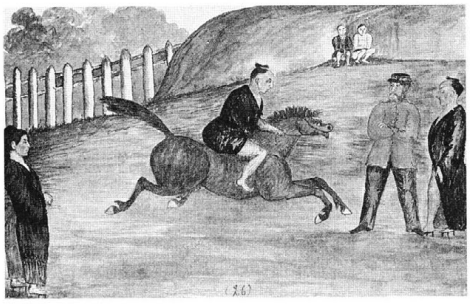
イギリス海兵隊の士官兵舎
The Royal Marines Museum 所蔵

写真は六四年から翌六五年にかけて駐屯していたイギリス海兵隊士官、ノーコックの旧蔵アルバム中の数葉である。兵舎内で働いていたと思われる日本人の姿がとらえられている。大人ばかりでなく、子供の姿も見える。すでに先の公告にあるような洗濯や繕い仕事に雇われたものであろうか。

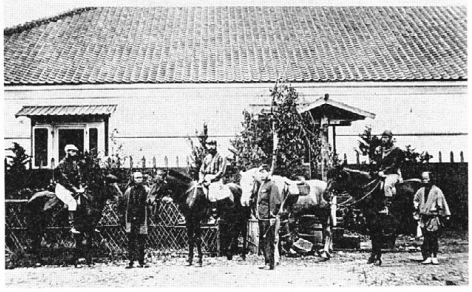
乗馬に興じる海兵隊員らに付き従う別当の男たちもいる。スケッチは、六六年から六八年にかけて駐屯していた第九連隊兵士が描いたものである。



イギリス海兵隊の閲兵場と兵舎
The Royal Marines Museum 所蔵



第九連隊兵士が描いた
駐屯生活のスケッチ
Norfolk Museums Service 保管
Roral Norfolk Regiment Collection



乗馬に興じるイギリス海兵隊員
The Royal Marines Museum 所蔵

このように横浜駐屯地は地域の日本人に、新しい経済活動の場を提供することになったのである。

一方、日本人が駐屯軍兵士から使い古しの軍事品などを購入することもしばしば見受けられた。

イギリス側はこれを問題とし、売り渡す兵士の取締りに乗り出し、日本側へも取締りを要請した。生麦村名主、関口家に残った『御用留』には、慶応三（一八六七）年および四年に奉行所ついで神奈川裁判所から出された購入を禁じる触書が書き留められている。

しかしこのような行為はあとをたたなかったとみえ、*The Far East*（七一年七月一日号）は、連隊名入りの軍靴を馬車道の店で販売していた日本人商人が捕えられた事件を報じている。供述によると酒に酔ったイギリス兵から購入したものだという。当時駐屯していたのは第一〇連隊であった。

このような不正な取引の一方で、正規の取引もおこなわれた。『横浜毎日新聞』（七四年五月二五日号）に、山手のフランス駐屯軍兵舎で中古軍用品の販売がおこなわれるという広告が掲載された。

販売品は海軍用器械・毛布・古布団・諸古鉄品であった。

英仏軍は七五年三月二日に全面撤退したが、*The Japan Weekly Mail*（七五年三月六日号）は、「撤退は横浜近隣の日本人にとっては重要な収入源のひとつを失うことになるため、日本人は撤退を惜しんだ」と、その経済的な影響を記している。

さまざまな衝突

一八六三年におきたフランス陸軍士官、カミュが殺された井土ヶ谷事件、あるいは六四年のイギリス第二〇連隊士官二名が殺された鎌倉事件は攘夷派浪人と駐屯軍との間の衝突であり、外交問題に発展したが、地域の日本人社会との間でも日常的な衝突はさけられないことであった。

上海の新聞 *The North China Herald*（六四年七月九日号）は、第二〇連隊兵士が日本人農夫に暴行を加えた罪で禁固六ヵ月の刑に処せられたと伝えた。また同年九月三日号は、第二九ボンベイインド人歩兵隊（ベルーチーズ）数名と日本人との間の乱闘騒ぎを報じた。以後、七五年の全面撤退時まで同種の報道はなくなることはなかった。

しかし明治期に入ると、駐屯兵士との間の衝突も幕末期とは異なった展開が見られるようになる。

『横浜毎日新聞』（七三年一二月一九日号）に、税関に勤める日本人が弁天通りの路上でイギリス軍兵士に被っていた帽子を鞭で落とされるという侮辱を受けたが、英語に堪能であったため山手の兵舎に出向いて隊長に直談判し、調練中の兵士の中から犯人をつきとめたという記事が掲載された。これまでは言葉がわからないために被害を受けても泣き寝入りする日本人が多かったが、今後はこの税関職員を見ならい、政府の指導に従って洋学を学びたいものだという結語で記事は終わっている。

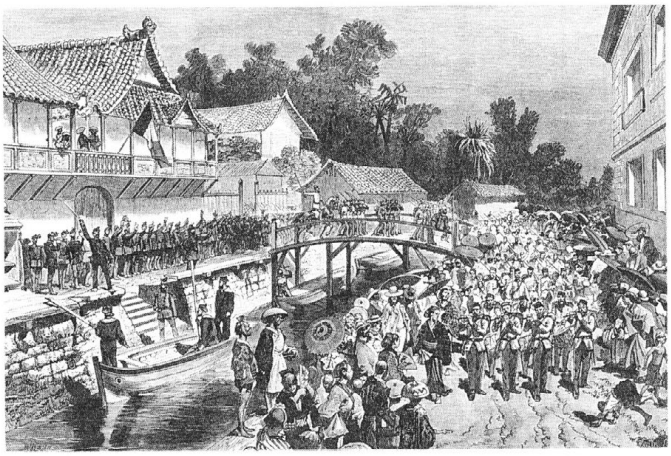
一八七五年三月一日、英仏軍は山手の兵舎を引き払って乗船。翌二日、横浜港を出航した。

絵は、フランスの絵入り週刊紙 *Le monde illustré*（七五年七月二四日号）に載った撤退風景である。谷戸橋を渡って港へと向かうイギリス軍、兵舎前に並んでそれを見送るフランス軍、そして沿道には多数の居留民や日本人たちが別れを惜しむ姿が見える。

ここで紹介したのは、おもに「内外新聞記事に見る英仏駐屯軍」（『史料でたどる明治維新期の横浜英仏駐屯軍』横浜開港資料館編、平成五年刊）からの抜粋である。駐屯軍と同時代の新聞、約五〇紙から駐屯軍関係と思われるあらゆる記事を抽出して年表にまとめたものである。参照されたい。

また、横浜対外関係史研究会と当館との共編で駐屯軍に関する論文集刊行を近く予定している。

（中武香奈美）



英仏駐屯軍撤退風景　当館蔵

展示余話

山手ビール工場の跡地より

前回の企画展示「工業都市への鳴動―ビールから自動車まで」は、副題が示すとおり、ビールをもって居留地工業の象徴とし、自動車をもって現代工業の開幕として、それぞれを展示の始期と終期にあてた。また外国人経営の造船・機械などの技術が、日本人に普及していく場としての横浜を、人物を軸に紹介した。

横浜開港資料館では工業化を本格的にとりあげた企画展示をおこなっていなかったので、今回初めて紹介された資料の数は多かった。しかし、ビールに関しては、当館は昭和五九年（一九八四）に「ビールと文明開化の横浜」と題した展示をキリンビールと共催で実施しており、今回はそのおり展示された資料や当館所蔵の写真、丸善所蔵のレーベルなどを紹介するにとどまった。ところが展示期間中ばになって、新たな資料が発見されたのである。

関内から西の橋をへて山手トンネルをぬけ、本牧方面にすすむと、その一本山手側の道沿いに妙香寺があり、妙香寺前の交差点の次がキリン園公園前の交差点となる。交差点を山手側に折れると、通称「ビヤザケ通り」となり、一〇〇メートルほど緩やかな坂をのぼると、北方小学校の手前に、キリンビール発祥を記念した巨大な石碑のあるキリン園公園となる。現在の町名は中区千代崎町で、明治期は山手町の一角をしめた。

交差点とキリン園公園の中間、「ビヤザケ通り」沿いの宅地から、ビール工場の遺構が発見されたのは一二月上旬である。宅地といっても、道路より二メートルほど高い「地形」であり、駐車場をつくるために土地を削り、さらに道路より五〇センチほど掘ったところ、ビール工場の遺構が発見されたのである。

「C. W. & Co」の名が刻まれたガラスビンの底

宅地を購入された川俣和博氏は、横浜の歴史に詳しく、この場所がコープランドのスプリングヴァレー・ブリュワリーからジャパン・ブリュワリーをへて、麒麟麦酒へと続くビール工場の跡地であることをご承知で、建設業者へも遺構・遺物が発見されたら知らせるように事前に指示されていたのである。

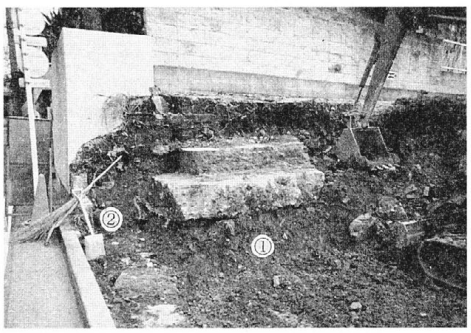
私たちが現場を訪れたのは一二月二〇日であった。遺構は、二層にわたるもので道路より一メーターほど内側、二〇センチ高い位置に、セメントの土台とレンガ積みの遺構が大きく出ていた（遺構1）。しかしその土台の下三〇センチのところからは、排水に用いたと思われる土管が発見され、ほぼ同じ高さで道路に近い位置からは、さらにレンガ積み遺構が発見されたのである（遺構2）。

遺物としては、「C・W・&Co」の名の入ったガラスビンの底の破片が、道路に近い位置から出土していた。これは明治三年（一八七〇）ころスプリングヴァレー・ブリュワリーを創設したコープランドと、明治二年創設のジャパン・ヨコハマ・ブリュワリー支配人の経験をもつウィーガントが共同経営していた、明治九年から一二年までの時期のものである。また陶器製ビンも、口が破損しているものの胴体がほぼ完全なものが出土した。

その他の遺物としては、レンガがある。そのなかで桜の刻印のあるものは、東京の小菅集治監製のものであることが判明した。また「三石耐火煉瓦」の刻印のある白レンガもあった。さらには、瓦・スレート・食器の破片などがある。

遺構2はガラスビンの底と同水準の位置にあり、スプリングヴァレー・ブリュワリー時代のものであることは間違いない。明治一七年（一八八四）経営が思わしくなくなったスプリングヴァレーは、営業を停止し、翌年ジャパン・ブリュワリーが跡地を継いだ。遺構1は新設されたジャパン・ブリュワリーのものである。

しかし耐火煉瓦が出土したからといって、そこにボイラーや釜があったとするのは間違いであろう。工場は大正一二年（一九二三）の関東大震災で崩壊し、麒麟麦酒は生麦に工場を移転した。山手の跡地は昭和十一年（一九三六）に住宅地として分譲された。分譲に際しては、緩やかな斜面であった工場地を、宅地として造成したものと考える。したがって、道路より二メートルほど高い「地形」は人為的なものであり、大震災で大量に出た瓦礫を造成に用いたとみるのが適当であろう。実際削り取った土地の断面は、土砂とレンガとが無秩序に露呈していた。



土中より露出した、ジャパン・ブリュワリーのセメントの土台とレンガ積みの遺構。さらに①の位置からは土管が、そのほぼ同水準の位置②からは、スプリングヴァレー・ブリュワリーの遺構が発見された。

出土したビンやレンガは、急きょ展示に利用させていただき、ビールに関する展示を充実させることができた。このような成果をみるにつけ、横浜でも産業考古学がいっそう盛んになることを願うしだいである。

（平野正裕）

資料
よもやま話

幕末の日記を読む

—「横浜日記」に記された開港場—

当館では来年四月末日から日記を題材にした展示を計画している。この展示は、当館が開館以来十数年間にわたって実施してきた古文書調査の過程で、その所在が判明した日記を一挙に公開するものである。展示の構成については現在企画中であり具体的に示すことはできないが、江戸時代後期から明治時代後期までに記された日記を展示し、日記を題材に近代横浜の歩みを紹介してみたいと考えている。

ところで、ここに紹介する「横浜日記」は当館が所蔵する日記のひとつで、現在企画中の展示に出品する予定のものである。展示には横浜の歴史を現在に伝える多数の日記を出品するが、この日記も幕末の横浜の様子を記した貴重な資料である。そこで、ここでは「横浜日記」の内容を展示に先立ち紹介してみたいと思う。

「横浜日記」は文久元年(一八六一)五月に記されたので、江戸に住む武士が横浜を訪れた際の「道中日記」である。筆者の名前は分からないが、日記の記述から見てどこかの藩の藩士と推測される。

紙数の関係で日記全体を紹介するわけにはいかないが、ここでは江戸から開港場に至る部分と開港場での見物についての記述を断片的に紹介してみたい。

開港場までの道中

文久元年五月十一日ニ暁三ツ拍子木と之時ニ桜田邸を出て行く、同々行く人ニハ原三左衛門方ニ関新右衛門なり、外ニ我等弟子壱人、供人ハ両人ニて、共ニ六人行く、(中略)生麦村ニ至れハ大きなる茶店あり此処ハ河崎と神奈川の間宿ニて立場あり段々繁盛すと云ふ、子安村ニ至るに子安観音堂ありて子生山東福寺と云ふ寺あり、又護国山福寿寺と云ふ有り、右ニ見ゆる山脇にあり、世修浦島寺と称ス、昔ハ帰国山浦島院と云ルる由(中略)神奈川本宿入口之所を青木町、其先を新町と云、其口に松平隠岐守殿の警衛場之構海岸ニ有之、又町中ニ夷人の旅館有之、旆旗を建有之、魯西亜人なる由、町中右之方ニ洲崎明神之社有之、門前ニ番所有之、其所より横浜往来之舟場也、是より乗船すれハ海路直ニ横浜へ労セす至るへけれと、我ハ陸を行んとセし故ニ船場をハ直ニ台の方へ赴く、町の右ニは山連りて熊野権現之社、観音山稲荷飯綱山寺も数多有之(中略)台の茶店ニて暫く休ミ、横浜の事をきくに両帯刀セし者ハ往反六ケ敷由ニ付、此処ニ刀をハ頼ミ置、一刀ニ相成り町家の人の如くニ成りて行ぬ、軽井沢・青木町と申を過行ハ左に折れて追分ケとなり横浜へとしるしの石を立、左して行ハ芝生村と云ふ有り、小橋ありて新田間橋と記す、又、平沼橋と云ふ有りて余程大きなる橋なり、此辺を都て池沼の多き処故、道ハ石ニて積上しと見ゆ、又、石崎橋と云有りて此辺石崎村と云ふ、民家数軒有り、又公儀より御下人の諸組、此処之固番のため此地ニ勤番ニ移り住候者の由ニて長屋作の宅札を掛ケ候長キ家幾棟も有之、又ハ頭立候旗本体の役人衆ニも有之ハ長屋門の居宅も処ニ有之、山坂ニあり右ニある山ニハ天神の有ル処を天神山と申、不動を建て有之処を不動山と申、少シ左ニ有之をハ伊勢宮と申山ニては間を通り行くニ切通し候路と見へ、新ニ道幅を広くし両側ニハ追々家作致し、方々より移り来ル事、水のひきしニ付くか如しと見へ、処々ニ普請店々を相開き候事、幾許と云ふ数を不分、金毘羅之社も有り、又寺有之、増徳院と申も可有之、夷人の屍を増徳院ニ葬り候と申事承り候

開港場見物

兼て親之ある薬店の此処ニ移り居ル桂屋喜助と申者ニて住居ハ南中通り三町目角と承り処々相尋、漸其屋ニ尋当り参り見れハ喜助なる者店ニ居り合、打ち驚き皆々を迎ひ入れ、夫々挨拶し、さて横浜を一覧せんと承りし由と申(中略)宅へ小の刀をも指置行ねハ能見物する事不相叶とて丸腰となり町人風之小紋形ニ桂屋紋の三ツ星付ケたる絽の羽織を着セ鞋ハ脱、麻裏と申草履に雨天と申日傘を手に持、町家の人之如く出立て行く、夷人の館ニ入らんとする時ニ或ル役所とも申べき住宅ニ喜助参り、何か断り申て暫く待居り夷人の館へ入ル、アメリカ・エキリス等段々旅館ありて外面ニは板ニて囲ミ入口ニハ冠木門有り、何国第幾号洋行と申板札を門の柱ニ打置、其内夥敷ハ英吉利第五十号と申札を門へ打たる所あり、其数多キを知るべし、玄関のある処もあり、なき処ハ一通りの戸口なりビイドロ障子ニて美事なり、座敷ハ総て板敷ニて畳敷不申故、則草履穿なから入ル(中略)係ル処ニ南京人参り弟子なる者ハ惣髪なるを見て頭項を撫て、何か云ふて桂屋ニ問ふ如く之内、喜助何か答へうセハ南京人の云ふ是ハ娘かとて彼を見て笑ひ申し、喜助か答ひしハ娘子なりと申候ものと被思、(中略)南京人ハ年も若く二十歳ニもなるかと被思候、余程綺麗なる顔児ニて日本人ニ能く似たる者なり、頭ハ辮髪ニして着服ハ白キ股引ニて黒き草履、セイの高サも日本人の如くニて手足却て日本より尋常也、着服を我等手ニて如何物とそんし能手ニてさわり見れハかふきぬ也、依之是ハかふ絹なりと申セハ南京人矢張、是ハカナキヌ也と答へ被申、しかれハ大抵之日本語ハ分かり申ものと相見へ申候、扨段々一間々々と見廻り候ニ或ハ机ニ向ひ腰掛ニより調へ居候も有之(中略)我等元来聞及し支那人趙宗敏と申、南京出生ニ候哉、頗ル一文人ニて至て文語を好ミ筆談等も出来候もの、参れハ諸事を忘れて談し居と申事、兼て参り候得共、同行の人ニ促され其暇も無之、只亜国之医生有之由ニ付、一覧致し度と申し候へハ則其人ニ遇申候

(西川武臣)

人物小伝

ポール・ブルームのいくつもの人生

―グリーン著 *BLUM-SAN!* から―

当館のブルーム・コレクションは日本でも有数の日本関係洋書のコレクションである。これはポール・C・ブルームが愛蔵していた個人文庫を、当館の設立時に譲渡してくれたものである。氏は開館式に来賓として元気な姿を見せられたが、二ヵ月半後、ニューヨークから突然訃報が届いた。それから十七年がたつ。

ブルームの伝記

ブルームの従姉の息子にあたるロバート・S・グリーンがブルームの足跡をたどり、敬愛する年長の友人の伝記をまとめようと思い立ったのは、彼の死後まもなくのことだと思われる。そして昨秋、その伝記がニューヨークで刊行された。タイトルもずばり *BLUM-SAN!*（ブルームさん！）という。副題に「学者・兵士・ジェントルマン・スパイ――ポール・ブルームの多くの人生」とあるように、波乱万丈の生涯が綴られている。

読者は、著者とともに、一九世紀末の横浜から、パリへ、イェール大学へ、第一次世界大戦の西部戦線へ、戦後のモンパルナスへ、南アメリカへ、第二次大戦中のベルンへ、そして戦後の日本へと八三年の歳月をたどっていくことになる。

その先々で多くの友人、知人、同僚たちがブルームについて語り、記憶が記憶を呼び起こしていく。本書のために著者が行ったインタビューは八〇回以上にのぼったという。さらにブルーム自身の日記や旅行ノート、筆まめだった彼の多数の手紙が残されており、著者自身も長年にわたる親交のなかで交わした会話の記憶を手繰っていく。その臨場感あふれる展開は、さながらテレビのドキュメンタリーを見るかのごとき観がある。それもそのはず、本書の裏表紙の「著者について」によれば、著者にはライターとしての――しかもとくにテレビの脚本家としてのキャリアがあるのである。私たち館員は長らく著者をジャズ・ピアニストとして知っていたが、実は二つのキャリアの持ち主だった。

一八九八年、横浜

伝記は遠く東欧の祖先の地まで遡るが、ここではポール・ブルームの父母が出会った日本から始めよう。

母ローズはユダヤ系アメリカ人。父と叔父が横浜でアイザックス兄弟商会を経営していた。父がニューヨーク、叔父が横浜に住んで事業を分担していたが、一八九一年、その叔父の訃報が届き、父はローズを伴って日本に向かった。

一方、ポールの父アンリ・ブルームはアルザス生まれのユダヤ系フランス人。彼の母は徴兵適齢に達する前に息子をパリに送り出し、貿易会社に職を得たアンリは、やがてその関係で来日した。

アンリとローズは神戸で出会い、一八九三年、ニューヨークで結婚式をあげる。アンリはウィトコフスキー商会の経営者となっていた。二年後に長女マーガリートが生まれ、横浜の山手居留地に屋敷を構えた。そして一八九八年、ポールが誕生する。翌年、居留地は撤廃されるが、その名残が色濃く漂うなか、父母の西欧世界と周囲の日本人社会という二つの世界でポールは育った。

パリへ、西部戦線へ

一九一二年、一家はパリへ移住した。ポールはジュネーブ湖畔の無規律な寄宿学校から、パリ郊外の「牢獄のような」寄宿学校へ、さらにパリ中心部の学校へと転校し、姉や従姉（著者の母）と束の間のパリの賑わいを楽しんだ。一九一四年が近づきつつあり、ベル・エポックが終わろうとしていた。

第一次大戦が勃発したとき、一家はノルマンディ海岸のトゥルヴィルの避暑地にいた。まもなく傷病兵が野戦病院に運び込まれるのを見るようになった。一家はパリに戻らず、そのままロンドンへ、さらに母の故郷ニューヨークへと戦禍を避けた。

ポールは自分の二重国籍を自覚していた。一九一六年、イェール大学の入試に合格すると、彼はアメリカ国籍を申請し、大学生活に入った。

一九一七年四月、アメリカはついにドイツに宣戦布告。六月、大学一年を終えたばかりのポールにフランスから徴兵令状が届いた。このとき徴兵に応じないですむ唯一の選択はアメリカの野戦衛生車隊に応募することだった。

一九一八年一月、四ヶ月の訓練のち、彼の属する部隊はフランスに向かった。三月、部隊はパリの北の西部戦線に到達。ポールはまもなく二〇歳になろうとしていた。

衛生車隊の任務は、前線で負傷した兵士を〝輸送〟することであった。最前線から一キロも離れていない、砲弾の飛び交う救護所で、負傷兵を拾い上げ、自動車で後方へ運ぶ。死は日常であり、生きて帰れる保証はなかった。一一月、ついに砲火はやみ、ポールは生還した。フランスの戦功十字勲章を授与されていた。

戦争中、一時前線から離れていたとき、ポールは生涯の友と遭遇する。アメリカ人の母をもつフランス人クロード・レミュザである。ドイツ軍の捕虜収容所から脱走を繰り返し、四回目に成功するとまた前線に復帰し、瀕死の重傷を負うといった猛者であった。彼は中国生まれで、三歳のとき箱根宮ノ下に避暑に行ったことがあった。重傷のレミュザのもとに届いた母からの手紙で、二人は、幼いころ宮ノ下で一緒に遊んだことを知る。はるか遠くフランスの戦場での再会であった。彼はポールにとってかけがえのない友となり、この伝記の重要な語り部となる。

ロスト・ジェネレーション

ニューヨークに帰還したポールは、夏のロマンスのあと、秋には何の意味も見出せないままイェールに戻った。戦場での殺戮と破壊は彼の心に深い傷、一生癒えることのない刻印をあたえていた。

二年後に大学を卒業すると、ポー

Robert S. Greene, *Blum-san!: Scholar, Soldier, Gentleman, Spy: The Many Lives of Paul Blum*（New York: Jupitor/RSG, 1998）の表紙。中央は、日本・スイス・アメリカ・フランスの国旗をアレンジし、ブルームの写真を配したもの。

ルは以前からの約束どおり、父の貿易事業を手伝い始めた。しかしビジネスに何の興味も持てなかった。彼は物書きになりたかった。二年間の戦争の体験は、彼自身が自覚していたよりはるかに深い打撃をあたえ、しかもその後遺症はまだ始まったばかりだった。

やがて父の事業から離れることを許され、彼は小説や旅行記事を書くが、思い通りの作品を生み出せなかった。一九二三年、懐かしい横浜は地震で壊滅し、二年後、母が二年間の闘病ののち他界した。同年夏には父が心臓発作で死去。ポールは強い孤独感におそわれた。出口を求めて彼は旅を始めた。長い彷徨の時代が来た。

一九二八年秋、彼はパリに着いて、ヘミングウェイ、ガートルード・スタイン、ペギー・グッゲンハイムらのグループに出会った。『日はまた昇る』の奔放なヒロイン、ブレット・アシュレのモデルとなった魅力的な女性とも交遊があった。ポールも虚無感と享楽に沈潜した「ロスト・ジェネレーション」の世代に属していた。

その当時「私たちは二人とも本当にヴィクトリア時代風の紳士でした」とレミュザは言う。趣味がよく、身だしなみがよく、やさしくて率直。そしてポールは友情にかけては完璧だった。でも、作家になるには自己表現の熱情と切実さに欠けていた、とレミュザは語る。

パリの生活でも癒されることのなかったポールは、一九二九年、南米への大旅行に出発した。孤独と憂鬱からの逃走であった。船や汽車、ケーブル・カーや馬を乗り継いでの一年半に及ぶ放蕩と彷徨の旅はやがて終わりを迎えた。彼は生還し、一二冊の旅行ノートが残った。その後もポールは東アジアへ、アフリカへと足を延ばした。そして旅行ノートをもとに執筆を試みた。それは何年も続いたが、ついに稿は成らなかった。旅行――発見の旅こそ自分の天職だ、とポールは知った。しかし腎臓摘出の手術と療養生活が待っていた。若さまかせのラフな旅行の時代は終わった。ポールは三九才になっていた。

第二次大戦と戦後

一九三八年、彼はパリ郊外の村で暮らし始めた。しかしドイツ軍の侵攻で、ユダヤ人のポールの身に危険が迫った。彼はかろうじてスペイン、ポルトガルを経てアメリカに脱出した。

やがて日米開戦。しかしポールは対独戦に参加することを熱望した。一九四三年冬、戦略事務局（CIAの前身）から呼び出しがあった。この新しい情報機関は急速に膨れあがりつつあり、すでに内部にいた従弟のロバート・ブルームやイェールの恩師がポールをスカウトしたのである。語学力、世界各地の経験と知識と観察力、天性の交友の才――すべてが今、彼の任務に役立とうとしていた。「運命のなせる業」だった、とレミュザは言う。

しかるべき訓練の後、ポールは対情報工作員となり、リスボン勤務を経てベルリンに行った。本書の四分の一を占める三年半の情報活動は、ポールの人生のハイライトであり、読者にとってはほとんどスパイ小説の世界である。中立国のポルトガルやスイスはスパイやエージェントが情報工作にしのぎを削る戦場であった。対情報工作とは、敵方の情報活動・情報員を暴くことであり、ポールは多数の人々と会い、真偽を見定める作業に時間を費やした。

数ヶ月のリスボン勤務ののちロンドン行きの命を受けたポールは、そこで最高機密の世界に足を踏み入れる。二重スパイ・システム、ドイツの暗号の解読システム、その二つの組み合わせによる情報工作である。一九四四年八月、ポールはベルリンに赴任した。のちのCIA長官アレン・ダレスが指揮を取り、ポールはその右腕として外交的任務にも活躍した。北イタリアのドイツ軍降服の秘密会談にはまずポールが赴き成功を収めた。終戦工作のため接触を求めてきた藤村義朗海軍武官との出会いもあった。

戦後のベルリンでは対ロシア情報工作が主となったが、ナチが略奪した金の奪回、滞欧日本人の帰国手配などの仕事もあった。的確な仕事ぶりと人間的魅力によって、ポールはいつしか伝説的な人物になりつつあった。しかし彼は情報活動にともなうモラルの問題を自覚していた。

一九四七年春にポールは帰国し、その年の暮、発足したばかりのCIAの東京支局長として東京に向かった。表向きの肩書は米大使館のアタッシェだった。日本の各界の知識人と親交を結び、情報を集めた。しかし朝鮮戦争勃発以後の冷戦の激化とともに、ポールのスタイルは時代遅れとなっていった。ポールは辞任し、一九七八年に離日するまで、本と旅と多くの人々との交友を楽しんだ。

本書は、研究者や批評家の手になる評伝とは一味違う。身近な人が愛惜をこめて描いた魅力ある人物と時代が息づいている伝記である。とくに語り手たちの多くがすでに鬼籍に入った今、その証言は貴重なものとなった。

（伊藤久子）

閲覧室から

五味文庫から（3）
―横浜料理業受取張り込み帖―

前回は、五味文庫のなかから西洋料理店開店広告を紹介しましたが、今回は「横浜料理業受取張り込み帖」を紹介いたします。

「横浜料理業受取張り込み帖」「五味文庫一〇―一四」は、崎陽亭、金沢八景の東屋、江之島の江戸屋といった料理屋の領収書三三枚の張り込み帖です。残念ながら五味亀太郎氏が、これら領収書を収集した経緯は不明です。また年号の記載されている領収書は「午」と記載された二枚のみで、領収書が作成された時期を知る手掛かりもありません。

領収書には、宛名が無かったり、「上」「御客様」といった宛名不明の領収書二二枚の他に、「野沢屋御店様」「入九御店様」といった、明らかに茂木商店宛ての領収書が六枚含まれています。張り込み帖の内容については、『横浜開港資料館五味亀太郎文庫目録』をご参照いただくことにして、ここでは横浜で有数の生糸売込商であった野沢屋（茂木商店）宛ての領収書一点を紹介いたします。

覚

二月十八日　御三人様
一　金一両三分弐朱　御料理
同　ブドヲ酒
一　金一分弐朱　壱本
廿九日
一　八百文　バン
壱つ
三月四日
一　八百文　同
壱つ
同五日
一　金弐朱　コロケット
〆金弐両一分弐朱也
壱貫六百文
右之通り慥受取申候
味洋亭
三月十四日
野沢屋
御店様

「バン」とあるのは、パンのことかと思われます。「ブドヲ酒」を飲み、パンや「コロケット」を食べるといった、横浜商人のハイカラな様子がうかがえます。

請求番号を「　」で示しましたので、閲覧室でご覧ください。

（石崎康子）

●閲覧室からのお知らせ

閲覧室の図書整理のため、左記の期間閲覧室を休室とします。

平成一一年二月二三日（火）～二六日（金）

また月末整理日のため、左記の日も閲覧室は休日になります。

平成一一年三月三一日（水）

ご理解とご協力を、宜しくお願いいたします。

資料館だより

▼展示

(1) **「山手の丘の赤隊・青隊―幕末維新の英仏駐屯軍」** 2／3(水)～4／25(日)　1863（文久3）年、イギリスとフランスの軍隊は前年におこった生麦事件を契機に、居留民保護と居留地防衛を名目として横浜の山手に駐屯を始め、1875（明治8）年の撤退まで、外国人居留地社会や日本人社会にさまざまな影響をもたらしました。今回の展示は、当館が海外で発掘した史料を中心に、その実態と影響を探るものです。

●関連イベント

F．ベアトの幕末日本写真パネル展

○開催期間　2／13(土)～3／4(木)
○会　　場　横浜開港資料館・講堂
○開館時間　9時30分～17時
（入館は16時30分まで）
○入場無料

(2) **「日記が語る19世紀の横浜」** 4／28(水)～8／1(日)　当館が開館以来10数年間にわたって行なってきた調査で所在が確認された日記を一挙に公開し、日記を題材に19世紀の社会・政治・経済のあり方を明らかにし、同時に当時の人びとの生活・文化・意識の変遷をたどります。

▼寄贈資料

(1) **横浜市二谷尋常高等小学校　昭和9、10、11年卒業写真帖ほか**　4点（東京都目黒区鷹番　羽島知之氏）

▲F．ベアト幕末日本写真集

フェリックス・ベアトは、幕末に来日したイギリス人写真家で、彼が撮影した当館所蔵の全写真236点を収録。カメラが刻んだ幕末日本の姿が、いま鮮やかに蘇る。

A4版200頁　本体価格2,000円
当館・受付と通信販売でお買い求めになれます。

[通信販売]
横浜開港資料館あて申込（はがき、電話、FAXいずれも可）
〒231-0021　横浜市中区日本大通3番地
TEL. 045-201-2100　FAX. 045-201-2102
※料金後払い、送料別途（大量の場合着払い宅配便）
※公費支払いの場合書類等は相談に応じます。

平成10年度
歴史講座（後期）

テーマ：浮世絵や日記で知る横浜の歴史

日程	講座名	講師
平成11年 3／6(土)	日記が語る 幕末・明治の横浜	西川　武臣
3／13(土)	浮世絵に見る 文明開化期の横浜	斎藤多喜夫
3／20(土)	"佐久間権蔵日記" を読む	佐藤　孝
3／27(土)	商権回復運動と 華僑商人	伊藤　泉美
4／3(土)	英仏駐屯軍と 幕末の横浜	中武香奈美

●時　間：午後2時から4時
（1：30 開場　2：00 開講）
●会　場：横浜開港資料館・講堂
●講　師：当館調査研究員
●受講料：2,500円
●募集人員：80人（多数の場合は抽選）
●応募方法：往復はがきに住所・氏名・電話番号を明記して下記住所へ。
●締　切：2月25日(木)　当日消印有効
横浜開講資料館講座係
〒231-0021　横浜市中区日本大通3
☎045(201)2100